文政元年寅十月二十一日

美濃屋

文政元年寅十月二十一日未の刻過美濃屋善吉の舍にて御說敎有り其故は、此善吉といへるは門前町に住居しけるが此度御器所村の新川といふ所へ家を求めて引越けるに依て先家主の追善を願ひ奉らんとて嫡婌樣を御招待申上ければ

金毘羅大權現御下りあらせられて

御說敎に

あの喜之がいふ事には、此家に付てお出なされた御隱居樣の御法事を勤めたいとて、善吉樣のお呼成されたのでやに。どうぞ、お前樣、お賴申ますぞえもしといふ。承知をしたぞや。ようしてやるよう。是れ、ようしてやるといふのは、なぜなれば、あの人は何程結構な御出家樣でやとお主達は尊まれれども、中々、後世においては助かるなぞといふやうなことは、まあ及ばぬ事でござるなう。お主の此度、此の家とやら、何とやらを求めたといはれるが、さて結構な緣を取結んだか、我には助かるべき緣とては、まあ、少しとてもありはいたさぬ。此度といふ此度は、さて不思議な事や。思ひもよらぬ緣を以て我を助けうとおもつて呉れられた。ァァ志といふものは、さて嬉しい事でござるぞや。夫れ先が嬉しい。さて忝なうござると禮をいふ、ようしたようと己がかう言て聞せるのでござる。夫れ、みつされ。お主達の心前では、さて尊きお僧樣でや、お知識樣でやのなぞといはれれども、如來といふ事を知つてはをれども、誰有て後世の忝ない、嬉しいといふ趣の道理、中々以て一つとして得道をしたものは一人もござらぬぞや。夫れござらねばこそ、結構なそれだけなお知識樣でやのと尊まれる身の上でも、中々以て得道したものは一人もござらぬぞや。又どうし

て出來よらふと思はれる。誠に、此の度の縁をもつてやうやうとわれは此の度、このやうな身分となりました事か。やれ嬉しうござる、忝なうござるといふべき事は、是れ、數にも限りにも譬べき事もなき故に、此方とても、ようしたようとかう言てとらするのでござるてなう。夫れ、みつされ。お主達は此世界にすめば、さて、知識長老樣、さて尊きお僧樣とて敬ひ奉られれども、さて其の敬ひ奉られる程の身の上が、是れ、今度、後世においては、助かる縁はない。といふのは、此の人々に事ならぬ敬ひ奉られる樣な我心を得いたさぬ故以て、是れ、後世が間違ふといふがここでござるぞや。又人々に尊まれる我身分なれば、其尊まれる我心を持れねば、今度は、大間違の地獄のどん底へほか參られぬのでござる。又なぜ參られぬなれば、人は、是れ、如來樣にも神樣にも心を改めあらためして其心前が尊みし我身分に相應をいたさぬものは、地獄のどん底へほか參られぬなう。

又喜之がいふ事には、さやうなれば、あ方の思ひ付成されたで、此度はあ方には結構な所へお出遊いてござりますかなもしと、あれが返いて尋ねる。なるほど、尤な事でござる。あれは後世に縁はござらねども、此度此家を求めて其棲のものが、我家とした其縁を以て、此度、あれが助かったのでござる。夫れ、助かつた事なれば、大きなとも、なんとも、中々、お主達には詞にも、何にも、どうもいひ盡されぬ事でござるなう。夫れ、あまた出家衆もござれども、人に敬ひ奉らして、我心で此縁はどういふ御縁のはしで我をこのやうに尊むべき人もあるか、やれさて、忝なや、嬉しやといふ我心に分別はなく、あちらへ參られた其出家は中々もつて助かるべきやうな事はかなひませぬ事でござるなう。

夫れ、出家にさへなれば、今度、後世にあぶなき事はなき事のやうに、思ひを懸て、何れのものとても勘考を召れれども、中々、出家といふ身分になるといふは、ことならぬおもき事でござる。又其面倒な事も辨もなく、出家にさへなれば、今度、後世にあぶなき事はないやうに、皆思ひを懸てをられうなれども、今度の一大事の所へ至つては、大間違ばかりでござるぞや。ござればこそ、お主達にも段々と話等を致すれば、夫れ、幼少よりあたまを丸め出家を立し其身分が、中々、助かるべき道等は出來よるやうな事は中々ござらぬ。是れ、お主達は出家とはなりはいたさねども、此

度の利益を以て、我心を一つかうああと取直しをいたせば、知識長老様からみては格段の違ひのお主達の身の上でござるぞや。

夫れ、みつされ。ようなれやうとはなぜいはふと思はれる。夫れ、出家とてあまたの人に尊まれる身の上でさへ、今度、後世に助かるべき縁のなき身分でござる。夫れ、此度はお主達を助けてとらして、あまたの衆生を夫れに付てやらうと如來から仰せ出されたお詞といふものは、是れもて大きなとも何とも口に演られぬ様な大きな事でござるぞや。

又如來様のお心といふものは唯何となく此衆生を助けたい助けてやりたいと、思召なれども、そこには是れ如來のお儘にもいたさぬものも又中にござるなう。夫れは何でござりますと、女が尋ねる。如來様には何にもありはいたさぬなう。如來は助けたい助けとらしたいと仰出されれども、又如來に何かをお通辭を申すものがござるなう。其お通辭をいたすものは、何といふなれば、お主達日々の體に引付て居るものでござる。夫れ、引付ては如來様に何を申上るといはれうか。如來に、中々以て、此の者においては、助かるべき縁とては少しとてもござらぬ程に、如來さま此の者は何

卒お前様のお引請はおはづし下されましよと申上るのでござる。すると、如來さまには、それは悲しいなあ。それはせつないなあと仰られる。あの者のをお助け下されては、殊ならぬ魔道の難澁に及びます程に、とかく、この者はお助け下されますなえもしと殊ならぬ賴みを懸るのでござる。その賴みを懸けた時は、如來は殊ならぬお苦しみには思召せられれども、我はなあ、此度、此世界といふをわがとうに預置いたものなれば、さて悲しいなあ、さて及ばぬ事かいなあ、其ものは何と一つ助かるべき縁を作て呉んかようと、又返いて仰ると、さてお前様はあぢな事を仰出されますなもし。この人間の出來し其時に、如來様から仰出されて魔道といふものが參つてお引合を付て置ました事に、今、あのものを助けねばならぬと仰出されれば、さやうなれば、我此世界は儘には成ませぬ事かなもしと、如來に向つて殊ならぬ恨を懸るゆゑもつて、さて、苦しいなあ、さて、ぜひに及ばぬ事かいなあとかう仰せられる事でござる。夫れ、みつされ。如來には、唯、何となく、助けたい助け取らしたいと仰出されれども、お主達の、皆體に引付て居る奴が有る故以て、日々のお主達が有様を如來様へいちいちにお達し申上る故もつて、ぜひなく如來様にもお詠なされるより外はご

ざらぬぞや。夫れ、喜之がおもひには、魔道にはなぜお預け成れたなもしと、あれが心で尋ねるが、魔道にお預け遊ばさねば、この人間の示も相出來よるべき方もなく、其の人間をおふやし遊す道理も出來にくうござる故以て、夫れ、魔道に皆、お預け成れた事でござる。又お主達でも、隨分と心をよう成て、人を大切と思ひを懸てをられたなれば、あしきもの魔道といへば、こわきものと心得てをられども、そのこわき心前でも、又其のこわきものの中からも、少々の又不憫も懸る事もござるには相違はない程に、とかく、よい心を持つてをらしやれ。先づ、いつまでしやべつても此通りの事でやに依て、是れで引程に。さう思つてたもらしやれや。

文政二年卯正月二十日

永田舍

文政二年卯正月廿日夜永田の舍にて御說教有りし其故は巾下の押切に住める講中日頃心を合せて三界の精靈追善の事を願ひ奉りけるが年の始なれば右の舍を請ふ

嬶姪樣を御招待申上右追善の事を奉願りければ

金毘羅大權現御下りあらせられて

御言葉に

あの喜之めがいふ事にはなう。皆樣が世界中の御法事をお尋ね被成たに。お賴み申ますぞえもしと、あれがいふ。あれ等にさういはしやれや。世界中の諸精靈は、お主達の志を待ち受けて居る程に、隨分とお主達の心前をよう持つて、あれらにそのよい心前の所をばはふくといふのが、お主達の大法事を召されてあれらに配分をさせてやられるのでやぞや。とかく心前よう持たれさへすれば、世界中はさて置き、此世界にはづれた所の者までも、お主達の心前さへ以てよう成つてやられさへすれば、其お主達のようなられた心前を以て、其緣を結ぶといふのでござるぞや。

喜之は、皆樣があの世界のお方のお爲めになるべきやと思召して、あのやうになされ進ぜられるかと、あれが心には、お主達の思ひを懸けられた所をば、ことならぬいたはしく思ひを懸けて居るさうにござるが、夫れ結構な事には相違はなけらねども、とかく何を思ひを懸けられても、夫れ、結構な我心前を以て召されねば、世界中も夫れ世界にはづれた所までも其配分と云ふをもらへば、夫れ後世につらなるべき緣が有る。

夫故もつて、お主達にも、とかく善心が第一でやぞや。善さへ持たれれば、その善の德といふも

のは世界中にはづれし其者迄も、お主達の心前たつた一つに依て其配分をもらふのでござるぞや。

お主達は是れ世界の世を渡られるものでやに依て、とかく、大切なといへば、是れ不淨財を大切なと心得て居られる故以て、其不淨財は省かでもえいぞや。其の不淨財は、世の渡りを致すべき内は、主達が夫れ無くては又凌ぎにくい所も有るに依て、夫は省かずとも、我一心の信を以て省けようと、是れも是れ、追々にお主達にも相聞かせ置いたる事でござるてなう。

とかく、我一心といふものは、心よう成つたのが我一心の信といふのでござるぞや。我心がようなれば、我一心の信が出來よつたといふやうなものでござるぞや。又心よくええ成らぬ内は、一心の信は未だ出來よる方もなき事かなと、我心でとかく分別を召されて、そこらをよう勘考を召れおかしやれやと、此方がいふのでござるぞや。

又喜之も、追々に、是れ世界中の諸精靈様方も御心に懸てお出なされるが、未だどうでやいなもし、と、あれが思ふさうにござる。是れ、お主達の心前では、此世界といふは廣きやうに相心得られて居られうなれども、世界といふは聊かな所でござるぞや。夫れ、聊かなれども、お主達の心前には、世界といへばさぞや廣き所と相心得られうが、たとへて聞かせると今度お主達のよい所へ參られた其時は、此世界の世界中の内が漸々と千と云て先づ譬へれば其千の一部といひたいが、一部はござらぬぞや。それだけな廣き所へお主達の身分も參られる身の上でござるぞや。

又お主達もようならぬ、ようならぬと云はれゝども、ようならねば、此方も云つてもえゝ聞かせぬが、直るべきところが又一つも二つもあるに依て、此方もどうぞして其の心前にしてやらう、やりたいと思つて、是れお主達と話等を致すことでござるぞや。さすれば直らぬことはないぞや。直るぞや。

夫れ、直る道が有るに依て、直せといふのでござるぞや。其道をえ尋ねずと、我心一つで其分別を以て付けられては、なか〳〵以て其道へは立よりにくうござる。とかく何もかも我心の任せはやめにして、如來様へ、こなたでやなくてはなりませぬに、此道を賴みますぞえと、唯だ何となく、如來と我と御相談を申すやうな我腹前にさへなられると、其道通りへ參られるに相違はござらぬ。我も、如來様、どうぞして、お前のやうな心を持たして下され、どうぞして賴むぞえと、是れを一

心に懸けてお願ひ申せば、自然の道理で其の道筋へも參るべき事もござる。とかく、我心は如來樣と同體にはこの淺間しき身分では、なりがたなくもござれども、是れ、此度、如來樣よりもこの辭を戴いた緣をもつて、夫れ、其道へ立よらせふと思召す如來の思召道理なれば、とかく、如來と我と御相談を申上げる我一心さへもたれゝば、自然の道理で、我一心も出來よる時節へも參る方も出來よる事もござる程に、とかく、何もかも如來樣にお任せ申す心にならしやれや。

喜之がいふ事には、春の始でござりますが、何もかも、是もお引受なされて是もどうぞお賴み申ますといふが、此方は委細承知をして居るぞよ。喜之がいふ事には、日々お願申上げれども、其御返答は承はらねども、どうぞお賴み申ますぞえもしといふ。承知をして居るぞよ。此方は承知はして居る程に、お主達は一心の信を持たしやれや。一心の信さへ持たれゝば、何もかも是世界の世を渡るとても滿足な所へも參られる程に、とかく、我は何もかも捨て置いて、どうぞして此一心の信を持つべきやと、夫れを隨分勵みさへ懸けられゝば、此方に捨て置くやうな事は有りは致さぬ程に、そこらも能く承知を召されおかしやれや。

春は目出度い事でも話さうやうに喜之も思ひを懸けれども、お主達に此話を致すのは、お主達は今では何の分別もなく、己に喋らして聞かれて居られるなれども、まあ、是程目出度い事はないぞや。是れでお主達は初春とて祝はれゝども、其祝ひはさておき、己にかういはせられて聽聞を召されるお主達の身の上といふものは、まあ、どれだけな德分を受けて居られる身分でやゝら、詞にも何にもいひ盡されぬ樣な事でござるぞや。

お主達も、是れ、やがてはあちらへ參らにやならぬ皆身の上でござる。其時といふはさても〳〵このやうな事かいなあ。まあ。何といはうなあ。あちらで聽聞をした時は、さのみ其のやうにも思ひも懸からなんだなれども、あの聽聞をした利益を以て、我身はこのやうな結構な事が出來よつた事かいなあといつて、其時こそは、誠にひち〳〵〳〵と踊るより外の事はない程に、是れ、春の初でやに依て目出度い事でも話さうやうに思うが、是れに越したる事はないぞや。

お主達が唯だ一心の信さへ持たれゝば、是れ、後世にあぶなき事はござらぬぞや。其一心の信を拵へさして、あぶなないやうにして取らしたい事と、此方が存じて、お主達にだん〴〵に話をいた

し聞かする事でござる。とかく、何もかも、娑婆も後世も、我信さへ持たれさへすれば、娑婆は聊かなれども、喜之は唯娑婆がえいやうに思ひをかけて娑婆が悲しい〳〵といふが、娑婆のやうな事は何でもない事でござれども、暫くこゝに居る中は唯是世事が苦勞に思ふさうにござるが、是れ、此度は、娑婆も、後世も引受けて居る程に、とかく、何もかも安心安堵の身とならしやれや。

我心を苦しめてはよい事はござらぬぞや。我心さへ安心安堵となられゝば、此娑婆もよい事が出來て來る。又是れ後世に於ては結構な所へ參るべき我々の身の上でや程に、とかく今度は大事の事と心得て、我心よう持たしやれや。是れ、よい所へ參るべき身の上なれば、此娑婆の聊かな事にかうのあゝのと、思ひを懸けるやうなところでや有るまいぞや。それ、かうの、あゝのと此娑婆の僅かな世を渡るうちに思ひをかけてはよい所へ參りにくうござるぞや。夫れ、思ひを懸けては參られぬに依て、娑婆は、如來樣がどうでも、かかうでもして下されさうなものと、かう我心に承知を召されて、安心安堵の身とさへなれば、是れ、娑婆も、今度も、よい事が出來て來るぞや。

夫れ、よい事が出來て來ぬのは、何故に出來て來ぬと思はれる。我心を樣々と苦しめて、是では

どうでや、あれではどうでやと、我心に任せて苦しみを懸けてみられる故もつて、何かの滿足が成りにくうござるぞや。如來と我心に承知さへ召されて、一心を以て懸けられる身分なれば、是れ、如來によもやお捨て置かれも致すまいてなう。

是れ、何程、如來が御不憫に思召しても、如來と我心に思ひのかゝらぬ者もござる。中には是も澤山にござれば、夫れ、其者は又お見捨と成るべき道もござるぞや。それでもお前樣はお見捨と成ると仰せるが、世界中の諸精靈樣を此度助けとらせうと仰せられるに、又如來と思はぬ者は、又お見捨も有ると仰せてはそこらは又私も一向合點　參りませぬとあれが思ふ。なるほど、尤なことでや。世界中の諸精靈は、お主達の心さへ以てよう成れば、あまさず、洩らさず、助けてやると如來から仰せ出されるぞや。我々が世界中の諸精靈を助けとらするといふものは、我心を一つ取り建てゝ直しさへすれば、世界中の諸精靈も助けとらせうと仰せられる。我一心を以て賴む時は、又そこにもたんと御分別もある事でござる。是れ、如來とはえい思はねども、彼奴等めが心に依て捨て置かれも致すまいと又ミせる場合もござるぞや。ござれば、夫れ、我心一つ直せぬ、たとへ、後世に

縁無きものでも夫れ、道は少々間違へども、又助かるべき縁も出來よるべきところが澤山にござる。とかく、お主達の心を正當の心に成つて、一心を持たれさへすれば、夫れ、世界中の諸精靈は如來にもよもやお捨て置かれも致すまいて、お主達さへ以てよう成れば、夫れ、又御取上げの者も澤山にござる程に、とかく、己に話をさすよりも、又お主達の心に一つ勵みをかけて、一心の信を持たしやれや。一心さへあれば捨て置きはいたさぬ程に、よく承知を召され置かしやれやといふのでござる程に、さう心得つされや。

又喜之がいふ事には、大きに御病人様もござりますが、一々に申上げましては、餘り數が多く成りますに依て、一々にはえい申上げませぬが、是れとても、どうぞお捨て置かれませずとお願申上げますといふ。承知をしたぞよう。捨て置きはせぬぞよう。捨て置きはせぬ程に、唯だ其病があらうとも、其中から、我一心をどうぞ勵みを召されおかしやれとかういふのでござる。さういふと、目のつぶれたのもござりますげなに、これもどうぞ自由のたせます樣にしておくれなされといふが、あれや、つぶれせぬぞや。お主達はつぶれて仕舞つたと思ふさうなが、驕てようなるに。あんじるなようと言つてやらしやれ。さう言ふと喜之が、まあちつとも見えませんげなに、どうぞ自由のたせますやうにお賴み申しますといふが、こゝ九日十日程過ぎると見えて來るに、案じるなようとかう言つてやらしやれ。それでも見えませぬげなと言つて案じるが、ようなる。やがてよう成つて仕舞ふに、案じるなようといはしやれ。

文政三年二月二十七日　永田舍

文政三年辰二月二十七日永田の舍にて御說敎有りし
其故は江戸より信者四五輩來たりければ
嫦娑樣御招待申し上げければ
金毘羅大權現御下りあらせられて
御說敎に

あの、喜之がいふ事には、江戸からお出でなされたぞえもし。お前樣にお目に懸りたいとておいで成されたに。お前樣えいやうに言つて上げ成されえもしと、彼奴が思つてをる。お主達は、遠道でやと思はれるなや。遠道でやないぞよう。さう言ふと喜之が、お前樣、百里もお出で成されたもの、何しに遠道でやない事があらうと言ふが、あれは、お主達が此道程(みちのり)にして歩まれるに依て、遠道といふが、お主達は是れ百里、貳百里、三百里でも、千里でも、貳千里でも、是れ、皆神や佛は一所(いつしよ)にござらつしやるぞや。夫れ、神や佛は一所にござらつしやれば、貳百里、三百里遠いと思はれうが、神や佛といふものは、千里でやあらうが、萬里でやあらうが、皆、お主達の側にござらつしやるぞや。お主達の道程に譬へると、こゝまで運ばれるに依て、遠いと思はれようが、此方の日分量からは、ついそこのやうに思つて居るぞや。思つて居るが、喜之が、お前樣、さう仰つても、百里からの道すがらは、たいていな事ではござりませぬといふけれども夫れ、今言ふ通り、百里や、貳百里はさておかしやれ、千里、萬里の道すがらでも、皆、是れ、神や佛はお主達のあたまの上にお住居をなされてござらつせるぞや。そんなれば、遠い事はござらぬぞや。

お主達はなるほど諸人の身分の事なれば、ことならぬ苦勞もござらうなれども、夫れ、お主達の苦勞を召れても、又此方に逢ふべき事と心得てをられゝば、つい、夫れお主達のたいぎな事が出來ても亦どうか、かうかなるものに相違はござらぬに、必ず心を遣はれるなや。

又、お主達でも、是れ、今いふ通り、神や、佛は何故に御苦勞をなされ下されうと思はれる。お主達を何もかも捨て置て、今度、後世といふがあるに依て、其の後世といふ所へ、お主達を呼んでとらしたいとて、皆、是れ、神、佛は諸共に御苦勞をなされる事でござる。お主達は、何にも知られぬ身の上なれども、今度といふは、今度、後世の事といふものは、どのやうな智識長老があつても、是れは存じたものとては一人もござらぬぞや。是れ、後世には、如來が待ち受けなされてお出で遊ばす、是れ、如來の慈悲といふがござる。その如來の慈悲といふものは、世界有うずる中に誰有て存たものがござらぬ故もつて、此度、如來樣より我に此趣の道理を諸人共によく〳〵相聞せ、今度の一大事といふを我躰内によう入れて承知をさしてくれたなら、此度は、誠に正身の如來樣よりお待ち受け下されるに相違はないに、此趣を相聞せ置くやうと仰せ付られた故もつて、此度、お主達と世界建て始りましてより始て諸人と、是れ、ものをいふのでござるぞや。是れ、世界出來しより、諸人に詞をかはせた事は是れまでござらなんだ事でござる。

此度は、是れ、お主達を引付て此趣の道理を相聞せとらするのは、是れ、婆婆建ち始りましてより始ての終り。もう、是れ、女命無くなつた後にては、どのやうな事がござつても、もう、是れはかへのない事でござるなう。此女命有りし中ばかりの事でござる。

すれば、是れ、此の度、お主達は遠道をかけて參られたと思はれうが、お主達の身分といふものは、まあ、是れ、どれだけな德分を得られる事でややら、詞にも數にもいひ盡されぬやうな事でござる。今、是れ、此世界でお主達を引付て、我がこうざいらしういひ聞せ置たとて、何の知れた事もござらねども、今度、あちらへまゐられた其時は、誠に嬉しいとも、尊いとも、忝ないとも、中々もつて、いふにもいはれず、泣くにも泣かれず、歡ぶにも限りがなし、何ともかともいひやうがなうて、さてもさても、是れは是れはと、夫れ、それだけな德をえられるお主達の身の上なれば、たとへ、百里、貳百里、參られたとていかうそんにもなるまい程に承知をして置かしやれや。是れ

此度は、誰が何といはふと儘よ。是れにもうましたる事とてはござらぬ程に、そこらをよく承知を召されれゝば後世もよし。今度もよし。どちらもよい事になるに相違はござらぬぞや。

又、事と道理によると、詞の道理で間違道理もござれども、そこは我一心の胸前でござるぞや。其一心の胸前さへ慥に持てさへをられゝば、後世は勿論、後世といはふか、現世といはふか、夫れに増したる事はござらぬ事なれば、神や佛は何にもお望といふものはありはいたさぬ程に、何もかも打捨て仕舞て、唯だ如來え、こなたでやなけらねばならぬに依て、こなた何もかもえいやうにして置つせえと、是れさへもつて、お主達の腹の中から思ひを懸けられゝば、如來は默つてはおいでなされるものではござらぬ。お主達の一心を以て其思ひさへ懸けられゝば、ヲゝよう思ふたよう。夫れはえいぞよう。えいぞよう。己が引請く置ぞようと、お主達の耳へは這入らねども、あちらでは其の御返答はあるに相違のないものでや程に、とかく人を憎まぬやうに、人を可愛ものとお主達も其心になられ。如來様は、一人とてもお憎みなされるものはござらぬぞや。又お主達の目分量で彼奴は憎い奴でやなあと思ひしものは、如來は、さてもさても悲しい奴めなあ。あのやうに人に憎いと思はれては、さて、悲しやなあ。さて、むごい奴やなあと、お主達の心に任せぬものは猶以ておいたわりがあるに相違はないに依て、お主達の心に得ぬものとても、さて、如來は御不憫を懸けてござるものかいなあ。あのやうな心前では、さぞやと思へども、如來の御不憫の懸かつた彼奴めなれば、さのみ憎うは思へぬぞと、かう心の取直しをして、其憎い奴には、心のいたわりを懸けてやらしやれや。夫れ、心のいたわりさへ懸ける胸前になれば、今度にあぶない事はござらぬぞや。又今度よい所へ參らうと思ふなれば、諸人共にいたわりを懸ける我心に貯へさへあれば、其のものは捨置まいと、如來様が仰せ出されたには相違はござらぬぞや。夫れ、人の憎いとおもつた奴を、我心で、さてむごい、さて不憫なと、思ひさへすれば、今度にあぶない事はありはいたさぬ程に。

夫れ、とかく、神佛を信心、信心と人に依てはいふべきものもござるさうにござる。夫れは大きに間違でござる。信心といふものは、諸人を可愛うおもふ其人が大信心者と、如來様よりお定め下される程に、とかく何もかも打捨て、人をむごい、可愛とさへおもへば、どのやうなものとても、其ものは、此上なしの大信心者でござるなう。すれば、夫れ、其の者は如來様よりは此上ないもの

とお取扱ひなされるぞや。

我が利口才覺を召されて是れでえい、あれでえいと、我心で定めを付ける事は、如來はきついお嫌ひでござる。定めといふは置くがえいぞや。定めは置いて、如來と何もかも御相談さへ申上て、如來様、私はかやうでござりますに依て、此趣に申出します程に、是れでよからうやうにお賴み申ますぞえと、是れ、此事がお主達の信心者の天上といふのでござる。

とかく、お經様は結構なものなれども、其經文をいか程讀まれても、我心に惡心を持て讀まれては、其經がむだ事となりますぞや。夫れ、經さへ讀めば、我はよい事と思はれうが、お經と我心と合躰といふをいたさねば、皆むだ事になりますぞや。お經讀まれる心なれば、今、お主達に話にした通り、夫れお經の合せものといふ其心を、我體内より承知を召されゝば、其大切なお經讀にも及ばぬ事でござる。全體、經文といふものは、我心に惡心ある故に經文を以つて、我惡心を消さうと思はれうが、中々さういふ道理には參らぬものでござる。夫れ、惡心を以て經を讀れゝば其因緣をもつて其の經文が地獄の中へ參て其經が角となつて我體をづぶ〳〵と突に相違のない事でござるぞや。夫れ、みつされ。結構なお經様、お經様といはれるが、あまたの人が皆其通りでござる。いか程な經文を唱へられても善心の貯へを召されずと、唯だ惡心をもつて、此經文で其惡心を消さうなぞと思はれては大きな間違等となります程にこゝらをよく承知を召され。夫れ、善さへ貯へを召されゝば、今度にあぶない事はない程に、よく承知を召されて置かしやれや。

又喜之がいふ事にはあのかたがたも、お前様に御苦勞に預るとて此度はお禮に參つたと仰るに、何もかも、お前様お引請なされてえい様にお賴み申ますぞえと、女が賴む。成程、心さへようなれば、何もかも引請るが、我惡心を持れては得引受ぬ程に、とかく善の貯を第一として、後世を歎んで、我思ひの儘も、皆お引請になるべきやと、そこらをよく承知を召されて、お主達もをらしやれや。

お主達は遠道を來られぬでも、皆是れ何所何方までも神や佛は滿々してお出でなされるに相違はないものでござる程に、そこらも亦承知を召れて、其心前を以て取扱ひを召れや。夫れ、其心をもつて取扱ひを召れれば、如來はお引請下されるに相違はござらぬ程に、よく承知を召れや。

是れ、神や佛は何所までも滿々してござれども、此女に聞かねば、何事も知れぬ程に、なぜ知れぬ事なれば、女無くては此方がものを得いはせぬのでござる。女があるゆゑに此のやうな話を致すのでござる程に、よく承知を召れ置しやれや。又お主達にも是から二年、三年過ぎたら逢事(あふこと)でや程に、さう思はしやれや。さういふと、喜之が、お前二年三年と仰るが、あなたがたは、まあ、二年三年過ぎて得お出でなされまいといふが、これや亦どうぞなるに、お主達も、さう思つてをらしやれや、これや亦三年過ぎると逢ふ時節が出來て來るに、其時になつたら亦はなさう程にさう思はしやれや。喜之がいふ事には、普請等も大きにどなたも御苦勞でござりましたに、お前樣どうぞ禮を言て上ておくれなされといふが、もつともな事なれども、禮はお主達に得いはぬぞや。禮はなぜいはぬなれば、お主達はよい事になられる身の上でやもの。何しに己が禮をいはふと思はれる、禮は得いはぬに。えいやうにお主達召れや。お主達が其心で居るものが、如來樣がどうしてだまつてござらうと思はれる。だまつてはござれせぬぞや。そんなれば己は得禮(えれ)をいはぬぞや。お主達の思ひのまゝにえい樣に召れや。己に禮をいへと、あれがいじるが、禮は得いはぬ程に、さうおもはしやれや。まあ是で引(ひく)に。さうおもはしやれや。さういふと喜之がなう、如來樣の何とやらや、何かゞいかい事ござりますさうなに依てどなた樣も、お心にかけてお出でなされるさうなに、何もかも宜しうお賴み申ますといふが、如來樣は、さう仰るぞや。ァァよい心になつてくれたかよう。よい心になつてくれたが、己が手前では大法事。まあ是にましたる法事はないと仰るに、是れよい心にならしやれや。夫れ、如來は手をとり足を取して、お待請下される。下されるには相違はない程に、こゝ等を承知をして、如來の法事をつとめたい御供養がしたいとおもふたなら、よい心を持たしやれや。夫れが大法事。如來樣は御馳走、御馳走とて、およろこびなされるに相違はござらぬ程に、よく承知を召されや、まあ、是で引くに。さうおもはしやれや。

文政三年辰四月十三日

永田舍

文政三年辰四月十三日晝八ッ半頃永田の舍にて御說
敎有りし故は、武士の信者、心を合せて願ふ心願の
事有りしに依て、右の舍へ打寄り
嫘姪樣を御招待申上ければ
金毘羅大權現御降臨あらせ給ひて
御說敎に

あの、喜之めがいふ事には、御大切な御法事樣でござりますにお賴み申しますぞえもし、又私は存じませんが、三年過ぎたら返答と、お前樣仰せられたさうにござりますに。どうぞよろしうお賴み申しますと言ふ。みな〳〵よう打ち寄つて、あの人の事を思ひ出いて、ようして進ぜられる。此度は事ならぬたいぎな事でござつたなれども、お主達も段々に心を懸けてをる、夫故もつて、此度は、先づ、あの人にもどうかかうかなされた事でござるぞや。

さういふと、喜之がもう左樣ならば、少しの御苦痛もござりませぬかえもしと言ふが、去年の二月十九日よりも其艱難の事は、もう、あの人の身の上にはござらぬぞや。又お主達も右の通りあの方をば大事の人と心をつけてやられれば、夫れあの人はまあおかしやれ。皆お主達の身の上を大切と心をつけた同樣の事でござる。すれば、あの人の事を必ずよい事にして遣つたと思はれるなや。此度の利益に付ては、なか〳〵お主達の力なぞにはおよび難ない事なれども、如來の慈悲が餘り餘りこぼれた其慈悲の餘りをお貰ひ申さねば、どうぞして上げたいといふ事は思へぬものでござるぞや。すれば、夫れ如來が思ひを遊ばいて其思ひ〳〵が餘りこぼれて、夫故もつて、お主達が誠一心

を以て、此度はあのかたに於ては捨置まいとはどこから思ひが掛らうと思はれる。如來の御不憫が餘る故もつて、お主達の心にどうかかうか捨ておくまい。どうでもかうでもあのかたにお任せ申上て、どうかなして貰はうと思ひを懸けた一念は、我心からは、なか〳〵以て出て參るものではござらぬぞや。すれば夫れ如來の慈悲の餘つて、其如來の慈悲を我にお貰ひ申さねば、其心にはなれぬものに相違のない事でござる。すれば我もよし人もよし。夫れ、我もよし、人もよしとは何故に思ひが懸からうと思はれる。此度の利益を以つて助け取らせ、捨て置くまいと如來の是れ御誓願をお建て遊ばいた、其のお建て遊ばいたお心が餘りこぼれて、其のこぼれたのを、お主達が拾ふておもらひ申し上げたやうなものでござる。是れ、かういはねば女も得道が參りにくうござるに依て、あらはに此趣をお主達に相ひ聞するのでござる。

すれば、喜之が、もう左樣なれば、御苦痛なぞもござるまいし、どのくらゐな鹽梅でござりますえもしと尋ねるが、どれだけな鹽梅と尋ねとらすれば、世界に譬へ聞かすれば、先づ今では樂な所が大名ぐらゐな所でござる。

すればお前樣の仰せるにはあのかたでも此世界をお暮し遊ばさせられるは、餘程御辛勞なと仰せ出されたが、やつぱりそれだけな御辛勞はござります事かなもしと、喜之が念をいれて尋ねる。さるほど、尤な事でや。大名といへども、お主達は大名と言へば、此世界へお出遊すは、嘸や、如來や神の化身と我には心得てをられうなれども、神や佛の化身ではござらぬぞや。なか〳〵以て、其日、其日の難澁苦行と言ふものは、言ふにもいはれず、語るにも語られず、其の我心のせつなさと言ふものはお主達のやうな安氣安堵な事ではござらぬぞや。分けては言はねども、其日、其日の辛勞苦勞といふものは、ことならぬせつない事でござるぞや。なれども、今、お主達の一心を以て賴みを懸けてやられる人においては、先づ、それだけな苦勞もござらぬぞや。ござれども、やうやうとまづ大名ぐらゐな所でござる。是も何故に是だけな安心安堵が出來て來たなら、如來がどうぞしてとあのかたが思召す。すればお主達とても、如來が思ひをお懸けなされる其思ひを我に配分致いた故もつて、それだけな心前を懸けておませられるのでござる。

夫れ、そんなれば、我に此事を思ひ出たの我一心のと又思ひをかけられると、そこらは又大きに

間違等が澤山にござるぞや。其間違等のなきやうに、此方がこの譯をお主達へよう話聞する事でござる程に、能くこゝ等を承知を召され置かしやれや。なか〳〵以てお主達の此世界の人に譬へれば大名位な身の上になつたなぞといふやうな事は、是此方が口廣き言分なれども、此世界が建ち始りてより始めての終りとは何を以て言はうと思はれる。誠正身の神や、佛が此利益なくては、此末世といはうか、何といはうか、もうそれきりの事でござる。此度は如來様が部類末孫までも捨て置かぬと仰せるは、お主達の誠一心の心を以つて捨て置くまいと、如來様より仰出されたお詞があるゆゑ以て、我も人もと其思ひ掛ておまさつしやつたのでや程に、如來様より我に戴いたものかいなあと思へば、お主達もいかう卒爾な事も出來まいてなう。卒爾な事を召れゝば、神も佛もおかまひなされぬものでござる。我正當を以て一心を懸られた其時のいふものは、神も佛もほろ〳〵とお泪をお流しなされて、さてもむごや、あれだけな心に能なつてくれたなあ。さて嬉しい事かな。よう成てくれたよう。己が禮を言ふぞよう。よう成てくれたようと、如來は是れお主達が目にも耳にも見えねども、あちらではお主達にお三拜を遊ばいて、お主達へのかた〳〵のお禮を仰出されるには相違のない事でござる。夫れ、相違のないお主達もあのかたより三拜をなされてお禮を受けたる我が身の上なれば、是れ、卒爾な事は出來まいといふのでござる。

とかく、是れ、善心といふものは、大切なものでござるぞや。お主達が善心といふを、我體内に貯へさへ召されゝば、其善に依て、神も佛も其側へお寄合なされて、さてよう思ふてくれたなあ。さて嬉しやなあ。是程よい事が有ふかなあ。よう思ふてくれたなあと仰られて、其前へお出なされて、是禮拜を遊ばすに相違のない事でござる。夫れ、相違のないものなれば、其時と言ふものは、如來もおいよし。おいよしおいよし。承知をしたぞよう。是よりも、我は善の貯へを召され。我に與へくれる我が身の上なれば、是よりもいさい承知をした程によいやうに召されやと、如來様が仰られるには相違はないものでござるに依て、とかく善さへ以て貯へれば、神も佛も皆御一統のお心なれば、どなたにも御承知を遊ばいてお取扱ひ下されるに相違のないもうでござる程に、とかく人を大切な、むごい事と思ふ我一心を以て召れる身の上なれば、如來も直様そこへ禮拜にお出遊すに相違のないものでござる。こゝらを能う承知を召れて、とかく、何もかもいりはせん程に、何事に

至るまでも、たつた我一つの善さへ以て貯へれば、此世界と言ふには、如來もほさつもござらぬぞや。是よりも空に皆是れ此方は是れ誠正身の如來に賴みを請けた金毘羅には相違はござらぬぞや。其金毘羅も、どなた樣にも禮拜をなされて忝なうござる。さてようおもふて下されたなもしと、かうどなたへも一禮を申上るは此金毘羅でござるぞや。

さう言ふと、又、喜之が思ふには、金毘羅樣は、如來樣と御同體かなもしと言ふが、是れ同體でなけらねば、どうして此方が此のやうな事がいへようと思はれる。皆世界では金毘羅と名を改めて、皆世界中で尊みを請くれども、其尊みが皆心得ちがひばかりでござるに依て、如來樣、我を尊んでくれれども、皆心得違ばかりでござるが、是が何と致しませうなもしと、如來樣と我と御相談を申上たれば、如來の仰出されるには、金毘羅殿え、こなたさへ以て結構な大切な人と思つて禮拜をして尊むものなれば、己も捨置まいぞえと、かう如來樣が我に仰られたお詞もござるなう、其お詞を以て我を尊んでくれたとて、何にも我が得にも損にもなりはせぬぞや。此方は金毘羅と名を改めて下し置れたのは何故に下し置れたと思はれる。此の日本國にかういふことを始め置て、此利益の趣をどうぞして如來のお心を、改めて皆人々に話聞せくれれよう。其時は我は金毘羅と名を改めるぞようと仰出された事でござる。是れ如來樣が直樣に此世界で名をお付なされた事ではござらぬぞや。其節の時には、是れ世界と言ふへ、一度參つた時に、我名は金毘羅大權現と己が名を改めてとらせふ程に、一度世界といふへ參つて、此世界中のものへ此趣の容態をことわけて相聞せ與れた時は、お主も己も同體の身分でやぞや。お主が金毘羅か、如來が金毘羅か、どちらがどうとも分らぬ位な事でや程にどうぞ此趣の道理を、我身になり代つて諸人に相聞せくれようと、其節のお詞にかたく〳〵のお約束道理がござるに依て、此度此女の口の中を借て、己が口の中へ飛込で、あれが口を以て言はする事でござるぞや。すれば、夫れ、お主達でも金毘羅は尊い人とは心得ては居れゝども其神と如來と、如來と神との其分別が相出來ぬ故以て此小割を言て聞するのでござる程に、こゝらを能う承知を召れて、金毘羅が如來か、如來が金毘羅か、どちらがどうとも、今では分りがたないやうな我が身の上なれば、世界の事も、今度の後世の事も、何もかも、皆此方がひつくるめての此度の利益の趣の道理なれば、そこらを能う我心に承知を召れてをられるなれば、何にても我信を

以て頼まれる其時は、何にても神も佛も皆御同輩のお身なれば、其時は御承知のあるに相違はなきものなれば、そこらを能う承知を召れ置しやれや。

又後世は大切なものに相違はござらぬぞや。お主達でも一度あの方へ歸り參らにやならぬ身の上なれば、夫れ、此世界は何故に來てをられたと思はれる。またどういふ道理で、後世といふがあつて、後世へお招きなされる道理等を事わけてお主達に聽聞をさせ、又是をよう承知をして、あの方へ參られる其人々といふものは如來が眞赤におなりなされて、お手をおひろげなされて、さて、よう來たようとて、お手をお廣げなされて、お抱きなされるに相違はござらぬぞや。ござれども、其抱れるやうな我腹前を持たねば、抱れられぬぞや。如來に抱れる抱き付く心を以て參つたる其の時は、如來は、則ち、お待請のお心なれば、やれ來たかよう。よう來たなあとて、其抱きなされた時のお主達の心といふものは、まあ、どうも嬉しいとも、尊ひとも、忝けないとも、是はやれやれ。是はどうでやえもし、是はどうでやえもし。是はどうでやえもし。もう畏る言葉もなき故以て、是は是はと、まあ歡ぶより外の事はない程に、どうぞしてお待請下される如來があるには相違はない

程に、そなたに、どうぞ抱付くやうな心に、是世界の中で心前さへ持ち參られると、お抱きなされるに相違はござらぬ程に、よう承知を召され置かしやれや。

さういふと、喜之が、江戸のお人も遠道でやに、又一ッお詞をお上げなされえもしといふ。承知をしたぞや、其心を間違へるやうな間違へさへせねば、後世もよし。此僅かな世を渡る事とてもいかう卒爾はござらぬ程にようなれようと、かういふのでござる程に、まあ是で引ます程に、さうおもはしやれや。

金言　文政九年戌五月朔日

文政九年戌五月朔日夜
御一尊様御大切におよばせられて
御一言づゝ時々仰せられ候
御詞に

あゝじゆつない。ころいておくれの。どうせるでやよ。どうせるでやよ。どうぞしておくれの。

暫く御間在らせられて

みんなの苦しみを己一人して引き受けるのでや。さうでやさうでや。

又御間あらせられて

皆の代りを、おれ一人して、せるのでや。我身一分ならとんな苦しみは無いが。みんなのくるしみを、己一人でくるしむのでや。さうでやさうでや。

又御間あらせられて

死にまに成つて、怖しいといふ事をよう承知した。アゝ怖しい事でや。人間といふは容易には助かれんものでやなあ。助かれぬといふ事をよう承知したアゝおそがい事でや。おそかい事でや。

又御間あらせられて

何にもない。御免なされ。御免なされ。なんにもないぞよ。なんにもないぞよ。何にもない。御免なされ。御免なされ。御免なされ。

又御問在らせられて

美しい鳥でやなあ、ア、うつくしいなあ。どうしやうなあ、ア、美しい鳥でやなあ。

又御問あらせられて

おこいておくれの。おきるでや、おきるでや。起こいて、起こいて。

右の御詞有りし故おきとうどざりますかと御伺ひ申上げ奉れば

おき度い事ないが。起きて。起きて。

又御問在らせられて善吉殿の手を御引き遊ばされて

まあちつとかよ。まあちつとかよ。まあちつとかよ。

又御問在らせられて

思ひを捨てゝおくれよ。思ひがあつては一所になれぬに。思ひを捨てゝおくれよ。思ひがあつては一所になれぬ。

又御問あらせられて

一遍おこいておくれ。おきるでや。おきるでや。起きてお前方に、お前方に、

右の御詞在らせられ候ゆゑ、おきたいかえもしと御伺ひ申上げければ

おきたい事ないが、一遍起きて、みんなに、みんなに、

又御問あらせられて

あたまをあげて。あたまをあげて。あたまを上げて、禮をいふのでやが。まあ叶はん。御免なされ。御免なされ。御免なされ。御免なされ。御免なされ。みんなが、永々の間、よう大事にしておくれた。御免なされ。御免なされ。御免なされ。御免なされ。御免なされ。御免なされ。

又御問あらせられて

娘が多うどざりますで、罪が多うどざります。こちらにも居ります。こちらにも居ります。お滅し下されましよ。お滅し下されましよ。お滅し下されましよ。お滅し下されましよ。お滅し下されましよ。お滅し下されましよ。お滅し下されましよ。お滅し下されましよ。お滅し下されましよ。お滅し下されましよ（數知れず）

又御問あらせられて

きのふも、死なず。けふも、死なず。あしたかよ。けふがえい。あしたがえい。けふがえい。あしたかよ。あしたかよ。けふがえい。

右の御詞様あらせられて程なく御目たえだえと成らせられ候へば、御枕邊の者ども、一同、肝を巻き、其座に鷺れ臥す。

泪ながらに御降參申上げ、紙にて御水さし上げ奉りければ、一々、御うなづき、其紙御吸ひ遊ばされ候、

御尊顔拜し奉り、座中の者ども落涙いたす、

暫く御問在らせられて畏多くも

御目ぱつちりと御開かせられ、御口大きくおひらき遊ばされ、座中の者どもの顔をきつと御にらめ遊ばされて、いかにもいぬめと仰せられさうなる御尊顔にて、御にらめ遊ばされ候へども、その御目のすずやかさ、誠に、大千世界、御一目にも、御覽遊ばしたらん様の御尊顔にて、其の味ひ有がたしとも、又怖しとも、言葉にはのべつくしがたき御有様なり。其の間、餘程の御間なり。御目より大きなる御泪、御流し遊ばされ、座中の顔を御詠め遊ばされ、御悲しみの御有様御泪、雨のごとくにて、御口御ふさぎ遊ばされ、一同に御胸ぎちぎちぎちとと御音在らせられ、御目ぱつりと御眠り遊ばされ候、御事誠に妙不思議なり。